

悠久録

十五夜

十五夜は旧暦八月十五日で「仲秋の名月」と呼ばれている。旧暦で八月十五日であるからいつもこの日が満月と云うわけではない。昔の人はこの月の満ち欠けから暦を作った。満月は月と太陽が反対方向にあれば輝いている面は地球側を向くので、丸い月満月(望)となる。月と太陽が直行する方向にあれば輝く面は半分しか見えないので、上弦・下弦と居待ち月・後の月など月の異名は多い。中秋の名月の後なので、「後の月」と言われた

月に菟が済むという習俗は広く知られている。良寛の「月の菟」という長歌が知られている。昔々、猿と狐と兔が住んでいた。この三匹は、とても親切で、本当に仲良く暮らしていた。そのことを聞いた天の神様が、哀れな姿になって、何か食べ物を恵んでほしいと頼む。猿は木の実を、狐は大きな魚を取って神様に食べさせた。ところが菟は何も差し上げるおのがないので、この体を食べてくださいと自ら火の中に飛び込んで神様に差し上げた。それで月に上って兔の姿になったという話である。

十五夜は里芋等を供える事が多い為に「芋名月」と呼ばれている。十三夜は「栗名月」とか「豆名月」と呼ばれている。この日は地元では、名月観賞という収穫感謝の祝いという性格を持つ。皿の上に団子・葉付き大根・ハタ芋・枝豆などを月の見える縁側などに供える。十日町市などでは「十五夜盗人」といって、子ども達が村を回り、このお供え物をぬすんでも罪にならないといわれていた。

澄み切った夜の空に輝く月を眺めるのはいかが

(ひこぜん)